讃美歌21　8

1　心の底より　神に感謝せん。
この朝を迎え　神をたたえん。
み子をおくり　われらを救う
神に栄光あれ、とこしえまで。

2　恵につつまれ　み守り受け、
恐れと不安の　夜はすぎぬ。
新たなる日　わが罪ゆるし、
いのちをたまえと　切に祈る。

3　いつくしみ深き　み手に委ねん、
この身も心も、日々の糧も、
共に生くる　愛する者も、
与えられしもの、そのすべてを。

4　恵みのみちびき　豊かなれば、
わがなすすべては　祝福うけ、
喜びもて　いそしむわれは
心より歌わん、「よき主よ、アーメン」。

Evangelishcs Gesangbuch (EG) Nr. 443　T:Georg Niege　M：Eisleben

1 Aus meines Herzens Grunde sag ich dir Lob und Dank in dieser Morgenstunde, dazu mein Leben lang, dir, Gott, in deinem Thron, zu Lob und Preis und Ehren durch Christus, unsern Herren, dein' eingebornen Sohn,

2 dass du mich hast aus Gnaden in der vergangnen Nacht vor G'fahr und allem Schaden behütet und bewacht, demütig bitt ich dich, wollst mir mein Sünd vergeben, womit in diesem Leben ich hab erzürnet dich.

3 Du wollest auch behüten mich gnädig diesen Tag vors Teufels List und Wüten, vor Sünden und vor Schmach, vor Feu'r und Wassersnot, vor Armut und vor Schanden, vor Ketten und vor Banden, vor bösem, schnellem Tod.

4 Mein' Leib und meine Seele, Gemahl, Gut, Ehr und Kind in dein Händ ich befehle und die mir nahe sind als dein Geschenk und Gab, mein Eltern und Verwandten, mein Freunde und Bekannten und alles, was ich hab.

5 Dein' Engel lass auch bleiben und weichen nicht von mir, den Satan zu vertreiben, auf dass der bös Feind hier in diesem Jammertal sein Tück an mir nicht übe, Leib und Seel nicht betrübe und mich nicht bring zu Fall.

6 Gott will ich lassen raten, denn er all Ding vermag. Er segne meine Taten an diesem neuen Tag. Ihm hab ich heimgestellt mein Leib, mein Seel, mein Leben und was er sonst gegeben; er mach's, wie's ihm gefällt.

7 Darauf so sprech ich Amen und zweifle nicht daran, Gott wird es alls zusammen in Gnaden sehen an, und streck nun aus mein Hand, greif an das Werk mit Freuden, dazu mich Gott beschieden in meim Beruf und Stand.

ピリピ人への手紙4章7節「・・・全ての理解を超えた神の平安が、あなた方の心と思いをキリストイエスにあって守ってくれます」(新改訳版)

今日のテーマは「戦争と平和と経済」としました。その目的は、「神の平安」を知ることです。私たちにとって、「神の平安」が、どうして重要なのか、そして必要なのか考えていただく、大事な機会にしたいと考えたいと存じます。

世界が平和でないと、経済は機能しません。同時に、経済が機能しないと、物資や人材の補給ができないので、戦争を続けることなどできないのです。これは、前の世界大戦で敗戦した日本において、おろそかになり、多くの悲劇を生みました。

「ロジステイックス(物流の管理)」の強化は、経済危機や感染症の発生などの際にも重要です。日本が、コロナ危機のなかで、世界からの輸入に依存する食料の不足にまで至らないですんでいることに感謝しなければなりません。欧米の大学にロジステイックス学部がおかれているのに、日本にないのが、不思議なくらいです。

感染症拡大による製造業におけるサプライチェインの切断は、国際的な工程間分業(fragmentation)の進んだ東アジアが、経済に大きな打撃をあたえました。これを一国内で完結させることは、もはや不可能です。アジアにおいて、経済活動の維持に必要な物資の供給不安を招かないことは、貧困拡大を防ぎ、この地域の経済が回復するための土台となると考えております。

以前紹介しましたが、欧米では、ネット上の読書クラブで、トルストイ「戦争と平和」に関する書き込みが急増しています。

そこには、19世紀初頭のナポレオン侵攻という事態で、欧州の社会で日常性が突然崩壊し、人々の生活や運命を大きく変えたことが記されています。トルストイの小説に描かれた世界と、現代のコロナ危機に襲われた世界の間には、命の不安のなかで、日常性が激変する点で驚くべき共通性があることが発見されたと思います。

宮廷で華やかな舞踏会がひらかれた翌週にも、主人公は自ら継承することになった土地と領民を守るため、過酷な戦場に赴かねばなければなりません。心身は疲弊し傷をおい、命を落とす寸前にまで至ります。隣の村が平和で日常が維持されているのに、自分の村は、激しい戦火に遭遇するということもあるのです。

このことから、新型コロナウイルスの感染拡大が進む地域で、患者が増加し重篤化するなかで戦場のようになる医療現場が目に浮かびます。感染で、家族から隔離され、治癒しても後遺症を抱える場合もあります。

この戦いが続くと、医療やサービスの従事者だけでなく、生産や物流を担う企業にも大きな負荷がかかり、従業員の家庭も蝕ばまれます。したがって、「ロジステイックス」を機能させ、こうした分野で就労する人たちの条件を改善することは、経済が機能しつづけ、社会が新しい方向に変化するために極めて重要だと思います。

今日の聖書の箇所に先立つ4章3－6節で、使徒パウロは、「いつも、主にあって喜びなさい。…あなた方の寛容な心が、すべてのひとに知られるようにしなさい。主は近いのです。何も思い煩わないで、あらゆる場合に感謝をもって捧げる祈りと願いによって、あなた方の願い事を神に知っていただきなさい。」と語ります。

私たちが、日々、思い煩うことは、いけないことなのでしょうか。人が思い煩うようなことが起きる現実こそ、問題なのではないのでしょうか。

思い煩っている人に、主にあって喜びなさいと使徒パウロはいいます。この「思い煩う」人に「喜べ」と語る逆説を、どのように理解したらいいでしょうか。

4章7節でパウロは、「そうすれば、全ての理解を超えた神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます」というのです。

現代人は、変化の激しい世の中で、日々の仕事や生活で、心が浮いたり沈んだりしています。私たちが直面する問題には、面倒だったり、解決がなかなか難しいことがたくさんあります。その結果、現代人は平安を喪失していると思われるのです。

それでは、聖書がいう「神の平安」とは、何のことでしょうか。それを一体、誰が理解できるというのでしょうか。それが、どうして必要なのでしょうか。

コロナ危機は日本でも第三波を迎え、11月12日の感染者は全国で1660人に達し、兵庫県でも81名の高水準です。そうしたなかで、私たちは仕事をし生活を維持するため、自分のことで精いっぱいになりがちです。

2020年11月の現在、仕事を失うひとが増加しています。仕事を失っていなくても、収入減少が打撃を与えています。低所得層や片親世帯を中心に、家賃が払えず、ローンが返せず、地域で食料の支給を受けるこどもも親も増え、解決が困難な課題を抱え込む危険にさらされています。また、感染の高まりともに、各地で感染地域から移動する人に対する差別事件が報告されています。

感染防止を強化しながら、日本経済をアジア経済と共に、回復軌道に乗せることが基本的に重要です。同時に、寒さの加わる冬に向けて、多くの心の平安を失う人たちが増加することに、真剣に対処しなければならないのです。

私たちは、自分だけでなく周囲の人たちがリスクに直面していることを理解しなければなりません。私たちに真の平安はありません。実は、平安は神様にしかないのです。少しでも平安を分け与えあうため、ひとりひとりが、もっと横のつながりを強めて、生きる勇気を持つ必要があるのです。

どうか、惨めな私たちをお救いください。どうか、「神の平安」のなかで、重荷に耐えられるようにし、愛されていることに、気づかせてください。

世界が不安でみちていても、私たちが「神の平安」をいただいて、広い心を取り返し、新たな世界を作り出すわざに参加する勇気を与えてください。「神の平安」は、私たちの理解を超えた豊かなものなのだと信じます。